



と ろ

清

- 特別展「発掘・発見 埼玉のふるさと
秩父のおごっつおう」…………… 2
- 博物館でコウモリ調査…………… 4
- 秩父地域が日本ジオパークに認定されました！…………… 5
- 「オオミツバマツ」の発見…………… 6
- 「かわはく」での教育・普及活動…………… 7
- 表紙解説・催し物（11月～3月）のお知らせ…………… 8

特別展「発掘・発見 埼玉のふるさと 秩父のおごっつおう」

若松良一

テーマの設定

埼玉県では、古くから、荒川や利根川の恵みである穀物、野菜、魚などを用いた特徴ある食文化を営んできました。しかし、ここ半世紀の食をめぐる環境変化によって、こうした伝統食は急激に失われつつあります。

ところが、県内で祭礼と年中行事が最も多く残っているといわれる秩父地方では、そうした機会に登場する、伝統食を発掘・発見できることが少なくありません。

そこで、平成22年度に自然の博物館が主体となり、川の博物館と共同して、秩父の伝統食調査を行って、その成果に基づいて展示の企画書を作成し、平成23年度には、川の博物館が主体となり、自然の博物館と共同して展示を具体化しました。

みどころは、実際に考証を尽くして調理した実物をもとに、製作した本物そっくりの食品サンプルの数々です。



傾斜した畑で育てられた餅黍と粟

秩父というところ

秩父地方は県土の三分の一を占めますが、80%が山地で、平地が少なく、土壤に小石を含み、水もちが悪いため、水田はわずかしかなかった。このため、半世紀ほど前まで、大麦に僅かな米を混ぜた割り飯が主食でした。しかし、小麦は傾斜のきつい畑でも生育し、うどんの原料となるので盛んに栽培されました。また、アワ・ヒエ・キビといった雑穀も救荒用に作られていましたが、今ではほとんど姿を消してしまいました。



質素なふだんの食膳

このように、ふだんは質素な食生活を余儀なくされましたが、正月、盆、御日待、祭礼などのモノビには、腕によりをかけておごっつおうを作り、共同飲食するのが古くからの秩父のやり方でした。

婦人だけの御日待と小屋飯

二夜様は、かつて秩父郡内で広く行われていた安産や子育てを願う女性たちの御日待です。秩父市中宮地の花見堂では、縁日の毎月22日昼前に、講中の女性たちが集まり、観音様にみたらし団子を供え、蝋燭を灯して拝んだ後に、持ち寄りの小屋飯（こじゅうはん）を出し合って、四方山話をしながら、楽しい食事会をします。昨年6月には、テーブルの上に、たらし焼きのごま味噌和え、しんし芋の甘辛醤油和え、ふきん棒の煮物などが並びました。



花御堂での楽しい春の昼食会

お天気祭の珍しい神饌

2月に行われる小鹿野町両神薄出原の諏訪神社の大祭では、桃の弓での射を射て、その年の天気を占う神事が行われます。当たったのが的の白い部分なら晴れ、黒い部分なら雨、外れは強風といえます。

神饌は、しとぎ餅という、米の粉・大豆の粉を練って整形し、加熱しない重ね餅で、神事が終わると、村人が持ち寄った、もっと大きなしとぎ餅を切り分けて、参詣者に振る舞います。たいへん起源の古い神饌で、県内では、ここにしか残されていません。



自家製のしとぎ餅を振舞う人

伝統食の起源

正月棚は、穀霊となって正月にやってくる古い御先祖様を祀る特設の棚で、鏡餅・御神酒・雑煮などを供えるほか、橙・福鱒・栗・吊るし柿・昆布などの縁起の良い供物を吊り下げます。これらは小正月に、下して家族で頂きます。



正月棚とそこから下げられた供物

盆棚は、お盆に帰ってくる御先祖様を迎える臨時の施設です。お盆の期間中、三度三度の食事を供え、家族も同じものを頂きます。長瀬町風布の

大野家では、小豆と金胡麻の2種類のぼた餅を15日のお昼に、手打ちうどんを夕食にお供えしています。高級なものを買って供えるよりも、子供が手作りのものをお供えすることを御先祖は喜んでくれるとのことでした。



盆棚に供えられたぼた餅と畑の作物

下の写真は、小鹿野町両神薄西平の天王様にお供えするネジと呼ばれる珍しい神饌です。旧暦の6月14日前後（新暦7月中旬）に、疫病退散を願って、天王様にお供えします。祈願が終わると、ネジを下げて宿に戻り、直会が終わるとネジを1個ずつ持ち帰り、神棚に供えた後、下げて家族で食べます。



しょうぎに載せて供えるねじ

これらの例から、神仏にお供えした御馳走を下げて、家族やムラの仲間と一緒に頂くのが、伝統食の起源といってよいのではないのでしょうか。

会期：9月17日（土）～11月20日（日）

会場：埼玉県立川の博物館第2展示室

（わかまつ りょういち・学芸主幹）

博物館でコウモリ調査

奥村 みほ子

当館に、コウモリがすみついていることがわかったのは、今年3月のことでした。仕事が終わりに、車で帰ろうと駐車場に出たとき、パキッパキッと金属がはぜるような音が建物の上部から聞こえました。何の音かわからず、あたりを見回していると、屋上と壁面の間のパネルの間から小さな丸い塊がニュッと出て、ポロッと落ちました。落ちた瞬間、翼を広げて飛んで行きました。コウモリでした。あっけにとられて見ていると、次々と出て来ては、翼を広げて飛んで行きました。この日は、30頭ほどの個体が飛んで行きました。最初のパキッパキッという音は、このコウモリたちの鳴き声だったのかもしれませんが。

日本から知られるコウモリ目は、5科37種あり、このうち大部分が体の小さな小型コウモリで、昆虫を食べます。小型コウモリの分布や生態は徐々に明らかになりつつありますが、人工建造物の利用に関する報告が散見されるくらいで、詳細な生態の観察や継続的な報告は非常に少ないのが現状です。

今年3月に当館で見つけられた、コウモリたちのねぐらは当博物館西側にある駐車場沿い(西向き)と2階テラス沿い(北向き)の2か所でした。そこで、このコウモリの小集団が当博物館をねぐらとしてどのように利用しているのかを明らかにしようと、夕方に、目視とビデオカメラを用いて観察を行い、ねぐらを飛び出す(出巢)コウモリの頭数を数えました。また、コウモリの鳴き声を人の可聴音に変換する機械(バット・ディテクター)を使い、ねぐらを出巢するコウモリの声の周波数を測りました。

調査した結果、40頭前後のコウモリの出巢が確認でき、出巢した個体は皆、近くを流れる荒川の方へ飛んで行きました。この中にアブラコウモリが数頭いることが確認できましたが、大部分は別の種類でした。当館を利用していた大勢のコウモリの種は、目視や写真およびビデオの映像により確認した大きさや、鳴き声の周波数が約20kHzであったことなどから、ヒナコウモリという種類であろうと推測されました。このヒナコウモ

リたちは天気の良い夕方には決まって、夕暮れ時に出巢していきました。

ところが、5月15日以降、2か所のねぐらのヒナコウモリたちで、出巢する個体が1頭も観察されなくなりました。一齐に集団が解散したか移動したと考えられましたが、解散なのか移動なのか、また行き先もわかりませんでした。この現象は、これまで他の場所で行われた研究から判明しているヒナコウモリの生態、すなわち冬季に集団越冬し、翌年の5月中旬頃にはこの集団が解散する、といった知見とも合致する現象でした。ヒナコウモリの越冬集団の観察例は少なく、しかも人工建造物の利用は珍しいため、当博物館は越冬するためのねぐらとして、貴重な場所であると考えられました。

同じ頃、寄居にある川の博物館でもヒナコウモリやアブラコウモリがねぐらとして建物を利用していることがわかりました。そして、川の博物館でも、ヒナコウモリは5月18日に大部分が、いなくなりました。

今回の研究では、ヒナコウモリが5月中旬に博物館から離れ、どこに行くのかわからなかったため、今後は、その行方を追えるように研究を進めていきたいと思っています。



出巢直後のヒナコウモリ (撮影：碓井 徹)

(おくむら みほこ・学芸員)



秩父地域が日本ジオパークに認定されました！

本 間 岳 史

平成23年9月5日午後、待ちに待った「秩父地域が日本ジオパークに認定された」との報が秩父市に入りました。推進協議会の会長である久喜邦康秩父市長は同日夕刻に市役所で記者会見し、吉報を披露して関係者と喜びを分かち合いました。また、秩父の大地の魅力を地域の子供たちや都市住民の皆さんへ伝え、地域全体の発展に全力を注いでいくとの決意を表明しました。そして、秩父地域の名称は「ジオパーク秩父」、メインテーマは「大地の守人を育む ^{もりびと}ジオ学習の聖地」に決まり、後日、秩父市役所や関係町役場の庁舎に懸垂幕が設置されました。

日本ジオパーク委員会の9月5日の審査では申請6地域（男鹿半島・大潟、磐梯山、茨城県北、下仁田、秩父、白山手取川）全員が認定され、日本ジオパークは20地域となりました。また、「隠岐ジオパーク」を世界ジオパークネットワーク（GGN）に加盟申請を行うことが決まり、本年12月1日までにGGNに申請することになります。9月17日には、ノルウェーで開催された国際会議で「室戸ジオパーク」が新たにGGNに加盟認定され、国内では5地域となりました。

秩父地域では、一昨年の5月に秩父市等が日本及び世界ジオパークの認定に向けて申請しましたが、テーマやストーリー、組織づくり、ガイドの養成、ジオツアーなどでの準備不足が指摘され、認定には至りませんでした。そこで秩父地域では、昨年2月に関係30団体で構成される「秩父まるとジオパーク推進協議会」を組織し、以降、日本ジオパークの認定に向けて、ジオツアー、講演会、解説看板設置などの活動を積み重ねてきました。また、5月の幕張でのポスター発表と公開プレゼンテーション、8月の日本ジオパーク委員会の現地審査への対応など、できる限りの手だてを尽くしてきました。それだけに、2度目の挑戦での今回の認定は、関係者にとって大きな喜びとなりました。

自然の博物館は推進協議会のメンバーの一人として、テーマやストーリーの提案、ジオサイ



秩父現地審査時に俳句を一句投じる尾池委員長

トの整理、ホームページのコンテンツ作成などに力を注ぎ、この夏以降は、特別展「秩父の大地は語る—地層と化石のドラマ—」（会場：おがの化石館、小鹿野町と共催）や企画展「空から見た秩父&ジオサイト50選」（会場：長瀨町観光案内所、推進協議会主催）などを開催してきました。私は博物館内の担当者として、ジオツアーのガイドや講演会・研修会の講師をつとめたり、秩父地域のテーマやストーリーを提案することなどを通じて、いくらかでも認定に向けて貢献できたのではないかと考えています。

今回の認定はジオパークの設営に向けたひとつの重要なステップではありますが、認定されることが最終目的ではありません。オリンピックにたとえると、ようやく出場権を得ることができたようなものです。秩父地域もジオパークのスタートラインに立つことができたということで、いよいよ「ジオパーク秩父」としての具体的な活動を展開していかなければなりません。推進協議会では、今年度の事業として、主要なジオサイトの個別解説看板の設置（10か所程度）やガイドブックの作成、ジオツアーの下見と実施を通じたガイドの養成などを計画しています。

これらの作業には、1市4町の教育委員会や博物館などが蓄積してきたノウハウを結集する必要がありますし、ジオツアーの実施には、NPOなどの力が求められるでしょう。これからです。

（ほんま たけし・専門員兼学芸員）

「オオミツバマツ」の発見

楡 井 尊

化石の世界では、恐竜や大型哺乳類化石（ゾウなど）は花形で、自然系の博物館の展示の目玉になっていることが多いものです。それらと比較すると、植物化石は比較的地味な取り扱いであることが多く、新聞雑誌で取り上げられることもあまりありません。

今回紹介する「オオミツバマツ」は、地味な植物化石の中でも、比較的良好に知られている植物化石です。名前のおと「大きな」マツボックリをつける三葉のマツで、現在、よく似ている種類の三葉マツは、北アメリカに分布しますが、日本には現在は分布しません。

オオミツバマツは、今までに上部中新統から鮮新統（約1千万年前～3百万年前）の東海地方の瀬戸陶土層（瀬戸物の原料になる粘土の地層）から多産するものの、他の地域の同じ時代からは、断片的な産出報告しかなく、完全な球果化石は、今まで関東地方では知られていませんでした（図1）。



図1 オオミツバマツ化石の産地。この報告も含む。ただし九州の記録は曖昧さが残る。

ところが今回、深谷市の平方付近の荒川河床に露出している楊井（やぎい）層から、完全な形の球果化石が秋山高宏氏（現上里町教育委員会）により発見されました（図2）。

オオミツバマツの球果化石は、大きいものでは、長さ14cmに達する見事なもので、球果鱗片にフック状の臍（へそ）が飛び出ていることが外

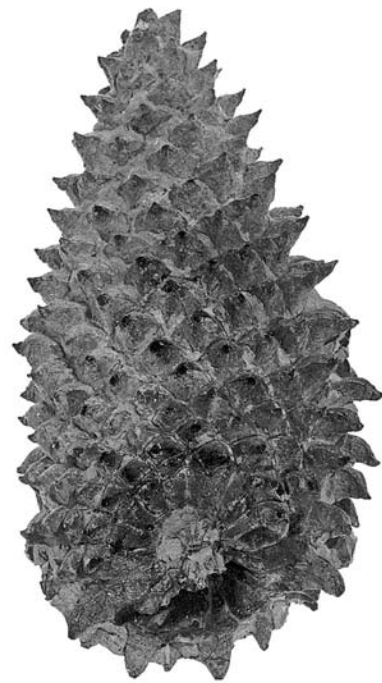


図2 オオミツバマツ球果化石 長さ14cm

見上の大きな特徴です。植物化石としては見栄えがすることと、命名者がメタセコイアと同じ三木茂博士であることなどから、多くの自然史系博物館の常設展示に展示されています。

当館でも是非欲しいと考えて、東海地方の植物化石を研究している西日本の学芸員に産地を紹介してもらおうとしていました。それというのも西南日本内帯の堆積物からしか産出しないという先入観があったからです。ところが、まさにその化石が自然の博物館からも遠くない荒川の河床から、発見されたので驚きました。

秋山さんの採集した標本は、まだクリーニングが充分でなく、球果鱗片の間に泥岩が詰まっていたのですが、もとより狙っていた化石だったので、一目でオオミツバマツとわかりました。この球果化石は学会発表を経て、当館の研究報告で正式に産出の記載が行われました。

この発見により、関東でもオオミツバマツが瀬戸陶土層と同じ時代に産出することが明らかになり、埼玉の自然の歴史に新たなページを加えることができたのです。

（にれい たかし・学芸主幹）

「かわはく」での教育・普及活動

青木 勝美

私たち環境担当4名は、寄居町にある埼玉県立川の博物館に駐在して業務を行っています。今回は、その業務内容のうち、教育・普及活動について紹介します。

I 出張授業等の実施

要請のあった学校には、出張授業を行っています。分野は、自然や環境についてだけではなく、学校の授業（教育課程）に合わせた実施もしています。子どもたちの自然や環境、科学に対する興味・関心を高められるよう、支援に力を入れています。



学校の理科室で行った川の水質調査

また、公民館などの生涯学習施設からも、講演会や学習会の依頼があります。内容に共通の話題などを盛り込んで、わかりやすく実施をしています。生涯学習の一端を担えるように取り組んでいます。

II 「かわはくまつり」への参加

川の博物館主催の「かわはくまつり」にも積極的に参加をしています。7月31日に行われた「かわはく夏まつり」では、自然の博物館コーナーとして、企画展「多様な埼玉の生きもの～虫・むしワールド～」の紹介や水生生物の観察、ヨーヨーのプレゼントなどを行いました。雨天にもかかわらず、当コーナーには559名もの方にお越しいただきました。

11月14日には「かわはく秋まつり」が開催されます。自然の博物館コーナーでは、『葉書の木（タ

ラヨウ）に文字や絵を描こう』などを実施します。皆様のご来館をお待ちしております。



自然の博物館コーナーのようす

III 電子顕微鏡操作研修会での支援

川の博物館には、走査型電子顕微鏡があります。電子顕微鏡の積極的な活用をめざして、年3回、県内の学校職員を対象に操作研修会を行います。環境担当職員は、その講師を務めています。

参加者は、真剣に実習に取り組み、撮影した電子顕微鏡写真を授業で活用するなど、とても意欲的です。各回5人が定員と少ないので、抽選になってしまうことが残念です。



研修会のようす

これからも、「身近な博物館」して、地域に根付いた活動に取り組んでいきます。

(あおき かつみ・担当課長)

表紙の解説

秩父の珍食品 その名もネジとは？

小鹿野町両神薄西平は、薄川溪谷沿いの5世帯からなる小さな集落です。その5軒が天王様の神饌畑としての麦畑を耕作しています。7月中旬に、その初物を持ち寄って臼で挽き、篩でふるわず、水を加えて捏ね鉢で練ったのち、しばらくおきます。外竈に湯が沸くと、三方に筋を付け、軽くひねって羽釜に入れ、浮き上がったところを、へらですくい上げ、しょうぎに取ります。これを竹筒に入れた御神酒とともに、天王様の祠に供え、疫病退散の祈願を行います。直会のあと、家に持ち帰ったねじは、輪切りにして食べます。そのまま食べても十分美味しいのですが、砂糖醤油に付けたり、焼いて食べる人もあるようです。



ねじといえば、秩父では、ふつう短いうどんに砂糖で煮た小豆を和えた料理を思い出しますが、西平のねじは、大きさや形が異なる上に、少しも甘くはありません。甘いネジは、群馬県や長野県の、秩父に隣接する地域にもありますが、西平のようなネジは、まだ見たことがありません。米の取れない地域の神饌として、ねじが作られたことは容易に想像がつくのですが、その起源はまだ明らかではありません。あるいは、中国から奈良時代に渡来した、ねじり縄形の揚げ菓子「かくなわ」と、どこかに接点があるのかもしれませんが。

(若松良一・学芸主幹)

催し物のお知らせ (11月～3月)

あなたも参加してみませんか

※埼玉県立自然の博物館は、快適な施設に向けた改修工事のため、平成23年9月1日から休館していますが、この間、県内各地で共催展や観察会などを開催しますので、ふるってご参加ください。

シリーズ等	行事名	実施日	実施時間	対象(定員)、参加費、会場など
共催展	カエデ&もみじ	11月5日(土)～12月4日(日)	9:00～16:30	埼玉県自然学習センター(北本市)
	フクロウ	11月26日(土)～1月22日(日)	9:00～16:30	狭山丘陵いきものふれあいの里センター
	埼玉の自然地形	1月14日(土)～2月19日(日)	9:00～16:30	埼玉県自然学習センター(北本市)
	深谷の化石—海から陸へのドラマ—	3月3日(土)～3月25日(日)	9:00～16:30	深谷市川本出土文化財管理センター
	春の息吹 春を彩る花・春をよるこぶ虫	3月5日(月)～5月13日(日)	9:00～16:30	三芳町立歴史民俗資料館
	特定外来生物にご注意	3月17日(土)～6月10日(日)	9:00～16:30	春日部市郷土資料館
自然史講座	第1回研究発表会(おもに生物分野)	11月27日(日)	13:00～16:00	中学生以上(50名)※1(参加費無料) 会場:越谷市児童館ヒマワリ
	第2回研究発表会(おもに地学分野)	3月11日(日)	13:00～16:00	中学生以上(50名)※1(参加費無料) 会場:嵐山史跡の博物館
観察会	ロウバイと冬鳥を楽しもう	2月4日(土)	10:00～12:00	小学生以上(30名)※1(参加費300円) 宝登山ロープウェイ駅集合・解散
	さきたま古墳群の石材をさぐる	2月26日(日)	10:00～15:00	小学生以上(30名)※1(参加費300円) さきたま史跡の博物館集合・解散
	早春の植物「ザゼンソウ」を訪ねる	3月4日(日)	10:30～15:00	小学生以上(30名)※1(参加費500円) 秩父鉄道武州日野駅集合・解散
その他の事業	県民の日記念事業	11月14日(月)	10:00～16:00	一般(定員なし)(参加費無料) 会場:川の博物館

●※1は、事前申込です。実施2週間前の火曜日までの受け付けで、定員を超えたときは抽選とします。

「往復はがき」か「WEBサイト登録フォーム」または「電子申請」で、お申し込みください。

●詳しいことは博物館にお問い合わせください。

埼玉県立自然の博物館ニュースレター 瀬 第17号 平成23年10月18日発行

編集発行 埼玉県立自然の博物館 〒369-1305 埼玉県秩父郡長瀬町長瀬1417-1

TEL 0494-66-0404(総務担当) 0407(学芸担当) FAX 0494-69-1002

URL <http://www.shizen.spec.ed.jp/> E-mail shizen@po.kumagaya.or.jp

